

## インターンシップ

2022. 11. 1

このところ教員不足であることが、世の中にも少しずつ伝わるようになってきた。学校の先生が足りなくなる、そんなことはないだろうと思われてきた。だが、実際に足りないのである。お医者さんもそうだが、学校の先生もいないと困る。

教員不足とも関わることだが、教員志願者が減少している。特段驚かない。当然の成り行きである。学校の先生の勤務実態が世に知られた以上、志願者が減ることはあっても増えることはないだろう。今では、医師の大変さも、知られるところとなった。

教員採用試験は、各都道府県や政令指定都市などで行われる。各自治体ともに、様々な対策をするようになった。試験内容が変わった。簡単にいうと、今までよりも楽になった。学生へのアプローチも変わってきた。

その流れの一環なのかもしれないが、本校にインターンシップの学生が3人やってきた。教育実習とは違う。5日間ほどの期間で、職場見学に加えて授業の補助などの体験である。授業の準備や片づけを手伝ったりする。

何年生なのかと思ったら、大学1年生と2年生だった。教育実習の前に位置づけられているということか。初日には、当たり前のように、校長室にあいさつに来てくれる。そこでは、あいさつだけでは終わらない。ソファに座ってもらい、いろいろな話をする。すると、いろいろなことがわかる。今どきの若者はちゃんとしているというか、コミュニケーション能力が低いとは思えない。

ある学生さんには、朝、いつものように学校の入り口に立っていたら、「校長先生ですか」と声をかけられた。珍しい。私のことを校長先生と判断するとは。朝早くから、学校の入り口に立っていれば、たいていの人はその思うか。

聞けば、本校の卒業生だった。まだ大学1年生だった。ということは、中学校を卒業して4年目である。知っている先生もまだいるだろう。しばらく立ち話をしたが、好青年である。ぜひ教員になってほしい。

教員不足の4文字が頭にあると、少なからず学生さんへの対応が変わる。大事にしなければとってしまう。大切な人材である。たった5日間だが、多くのことを感じるだろう。そして、考えるだろう。いい経験である。

もはや、何もしなくても教員のなり手が確保される時代は終わった。教員の魅力を発信していく必要がある。一番は、今、学校で活躍している先生方に、より輝きを放ちながら、充実した教員生活を送ってもらうことである。目の前の中学生から、一人でも二人でも、学校の先生っていいなあ、〇〇先生のようになりたいと思ってくれる人材を増やすことである。

教育実習生だけでなく、今回のようなインターンシップ生と接するのも勉強になる。数年後、福島県の教育界で生き生きと活躍する姿を期待したい。